

公益社団法人 日本化学会 バイオテクノロジー部会

NEWS LETTER

Division of Biotechnology, The Chemical Society of Japan

Vol. 16, No. 1 (2012.)

目 次

◆ 巻頭言	1
◆ 先端研究ウォッチング	2
◆ 若手研究者からのメッセージ	12
◆ 学生会員からの抱負	19
◆ 海外の研究室から	24
◆ 学会活動報告	27
◆ 各種研究会、国際会議から	29
◆ 編集後記	30

◆巻頭言◆

なでしこ JAPAN を目指して！？

京都大学工学研究科合成・生物化学専攻 浜地 格

2012年の夏は、日本中がロンドンオリンピックでの日本選手の活躍に沸き立った。なかでも、なでしこ JAPAN という愛称をもつ女子サッカーチームは、昨年のワールドカップでの優勝から一躍日本中の注目を集めるようになり、オリンピックでも予選リーグから決勝トーナメントまで、その健闘に日本中が拍手を送った。彼女らがあれだけ愛される理由は、いくつもあるだろうが、どうみても体格の劣るメンバーが、組織的で努力を惜しまぬプレーで大きな西欧のチームと互角以上に渡り合い勝利を掴むところが、大きな要因であろう。また、ある意味で極めて健全な女子サッカーのアマチュアイズムも日本人の琴線に触れているように感じる。何よりも素晴らしいと思わせたのは、彼女らの多くが、注目を集めるはるか前から、サッカーを愛して、必死に世界と戦う鍛錬を長い間続けてきたことであろう。バロンドールを受けた初めての日本人となった澤選手は、その代表的な存在であり、彼女を慕って、多くの若手が恵まれない環境のなかでも、研鑽と努力を続けて彼女の後を追ったことも、今や、よく知られる事実である。

私は、自分の名前研究室を持って10年あまりが過ぎた所だが、研究室のメンバー、特に博士課程学生以上の諸君に、『日々の実験や Discussion、国内外での学会発表、Journal への投稿からレフェリーとのやり取り、アクセプト/publish の過程は、全て世界と戦っているようなものだ』と言うことがある。ちょうど、香川がプレミアで長友がセリエ A で清武や長谷部らがブンデスで戦っているように、と、『試合で高いパフォーマンスを発揮するためには、地味で一見退屈な繰り返しや日々の努力が不可欠であり、体調管理さえも個人の責任である。何よりも彼らは、君ら（博士課程学生）と同世代か若かったりする！』と激励をこめて。国内に留まり、また出身地の近くしか知らないことの多い学生諸君は、彼らのすぐ近くに世界があることを実感として感じる事がなかなか出来ないようだが、数回の国際会議や短期でも留学を経験すると、あるいは手厳しいレフェリーコメントを論文投稿の際に貰うと、目が覚めたように成長を始める場合がある。そのような彼らの中に、化学の澤選手がいるかもしれないと想いながら、我が身を振り返る。自分は、女子サッカーチームのメンバーのようにサイエンスを愛し、無心に研究を追いかけられているだろうか？ まったく注目もされない分野に敢えて挑み、エンジョイしながら日々の研鑽と努力を怠らない姿勢を学生諸君と共有できているだろうか？？。。。。

10年か20年先に、日本にあるいは世界に感動と勇気を与えるサイエンス・テクノロジーが現れるのは、決して突然ではなく、色んな分野での長い年月をかけた、なでしこ JAPAN のような営みによってであろう。

NEWS LETTER Vol. 16, No.1 2012 年 8 月 日発行

事務局：〒101-8307 東京都千代田区神田駿河台1-5, 日本化学会バイオテクノロジー部会

Office of Secretary: The Chemical Society of Japan, 1-5, Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8307, Japan